

論 説

## 『常用漢字』の音韻論<sup>1)</sup>

西 村 康 平\*

### 1. はじめに

本研究の目的は日本語における漢語形態素<sup>2)</sup>の音韻構造の特徴を、『常用漢字』を対象とした調査を通して明らかにすることである。特に、音韻構造における様々なギャップや偏りを量的に示し、日本語母語話者の心的辞書における漢語クラスの音韻的特殊性について議論する。

#### 1.1 『常用漢字』と音韻文法研究

『常用漢字』は、現代の一般社会での日本語表記において、漢字を使用する際の目安の一つである。1981年に内閣告示『常用漢字表』として公布されたのち、2010年の改訂を経て、漢字2136字が記載されている。文字としての漢字だけでなく、その音訓も示されており、今回の調査対象となる字音、いわゆる「音読み」は2351音が示されている。

内閣告示自体でも述べられているように、『常用漢字』は日本語における漢字使用の目安・参考資料でしかなく、何らかの強制力を持つものではない。言うまでもなく、日本語母語話者の持つ語彙知識および文法知識とは直接のつながりはない。また、『常用漢字』に含まれる漢字や字音の中には、日常での使用頻度が低いやや特殊なものや、特定の地名だけに用いられる生産性が低いも

\* 青山学院大学国際政治経済学部准教授

1) 本稿は2022年3月8日にオンラインで行われた「第17回音韻論フェスタ」での発表をもとにしたものである。同会の出席者、特にコメントをいただいた皆様に感謝したい。  
2) 本研究では漢字一字の字音に対応する漢語形態素を調査・分析の対象とし、「社会」のような語彙化した二字熟語などは形態素としては分析の対象とはしない。

のもある。当然ながら、漢語語彙であれば漢字で書かなければならないわけではなく、平仮名や片仮名で記すことも可能である。

一方で、『常用漢字』に示される字音は、日本語母語話者の多くが持つ漢語形態素の音韻構造に関する知識や傾向に、比較的近いのではないかと推測される。多くのメディアや教育機関が、『常用漢字』を実質的な指針として導入している点を考慮すると、多くの母語話者の心的辞書や音韻文法の構築には少なくない影響を与えていることが推測できる。そのため、現代の日本語母語話者の持つ、漢語クラスの音韻知識の概略を把握する上では、資料として重要であると考えられる。また、文字としての漢字だけでなくその音訓も記載されており、音韻構造を確認できることも、この種の資料としては貴重である<sup>3)</sup>。文法知識や語彙知識そのものを直接観察することが難しい以上、こうした間接的な資料から文法知識の傾向を探ることには一定の価値があると言える。

## 1.2 漢語借入の歴史と音韻バリエーション

あらためて言うまでもなく、現代日本語で用いられる漢字の大多数は、過去の日本語が行ってきた中国語からの借入を起源としている。それらに対応する漢語形態素の音韻構造も、原則的に借入当時の中国語形態素の音韻構造から変化したものである。漢字と音韻構造の関係についての重要な点として、一つの漢字が複数の字音を持つことが多いことが挙げられる。借入時期の違いによる分類として、6世紀前後の呉音、8世紀前後の漢音、12世紀以降の唐音（唐宋音）の3つに分けることができ、特に前二者が支配的である。例えば「色」という漢字には呉音の /siki/、漢音の /sjoku/、唐音の /si/ といった字音があるが『常用漢字』に含まれるのは前二者である。また、これらの主要なグループに加えて、慣用音と呼ばれる歴史的な経緯からは逸脱した音韻構造を持つ形態素も少数ながら含まれている（沖森 2010、沖森・肥爪 2017）。

どの時代であっても、当時の中国語と日本語の音韻文法は大きく異なるため、

3) 例えば、文部科学省の定める『学年別漢字配当表』には漢字のみが記載され、音訓は示されていない。

借入には大きな音韻変化を伴うことになった。中国語原音から日本語に流入する際の主な変化としては、声調の消失、母音・子音の変化および中和、CVC形態素における母音挿入（CVCV化）、一部のCVC/CVN形態素のCVV化などが挙げられる。こうした変化の多くは、中国語では音韻的に異なる形態素の間の弁別を消失させ、いわゆる多くの「同音異義」である形態素の発生を多く招くことになった。例えば、「強」、「合」の2字は借入当時の中国語（中古音）ではそれぞれ /gɪaŋ/、/ɦaŋ/ と全く異なる音韻構造であったが、日本語に借入され音韻変化が生じた結果、両者ともに /go:/ という構造を持つようになった（沖森 2010, p.154-155）。

## 2. 『常用漢字』の音韻構造

Tateishi (1990) によって示された通り、漢語の音韻構造は、日本語全体で許される音韻構造と比較した場合、非常に強い制限を受けている。特に CV 構造についてはそれが顕著であり漢字一字に相当する形態素としては CV、CVV、CVN、CVCV の 4 型だけが可能である。こうした制限の最大の原因は、前述の通り借入元となった当時の中国語の音韻構造の影響のかなりの部分を、歴史的变化を経ながらも保持し続けていることである。

本稿の調査では、2010 年の改訂を経た『常用漢字』について、Tateishi (1990) に倣い CV 構造を軸とした分類を行い<sup>4)</sup>、さらに様々な要素についての比較を行う。同じ漢字の字音であっても音韻構造が異なる場合、例えば前述の「色」の字音である /siki/、/sjoku/ については、異なる形態素として集計を行った。

### 2.1 実在パターンとギャップ

前述の通り漢語形態素の可能な CV 構造は CV、CVV、CVN、CVCV の 4 型に大別できる。可能な母音は /i, e, a, o, u/ だが CVV 型の母音部分としては

4) ただし、「納得」の第 1 要素 /naC/ の様に CVC 構造のみが表れ、CVCV 構造を持たないものは例外として扱い、集計には含めない。

/e:, o:, u:, ai, ui/ の 5 パターンが可能である<sup>5)</sup> <sup>6)</sup>。子音として許されるのは /b, t, d, s, z, k, g, h, m, n, r, w, j/ および口蓋化音 /bj, tj, sj, zj, kj, gj, hj, mj, nj, rj/ とこれらの異音である。頭子音の存在は義務的ではなく、母音で始まるパターンも可能である。CVN 型の末尾鼻音は音素としては単一であり、環境に応じて [m, n, ŋ, ɲ] などの様々な鼻音が異音として表れる。CVCV 型の第 2 子音は /t, k/, 第 2 母音は /i, u/ のみが可能である。

これらの条件のもとでは、上記 4 型の可能な音韻構造のパターンは 655 通りになるが、『常用漢字』に字音として記載されているのは 299 パターンであり、356 パターンは対応する形態素の無い、いわゆるギャップとなっている。つまり、可能な構造のパターンの半分以下(約 46%)しか、実際には用いられていないことになる。こうしたギャップのうち、どれがより詳細な音韻制約によるギャップであり、どれが偶発的なギャップなのかは、歴史的な変化の経緯なども含め、さらなる精査が必要である。特にギャップの内、168 パターンは \*/sjai/, \*/kjotu/ などの口蓋化音で始まるものであり、何らかの文法的理由で口蓋化音が避けられていると考えられる。その一方で、\*/no/ や \*/zu:/ など、特に音韻的にはそれほど有標な構造を含んでいないにも関わらずギャップとなっているものも少なくない。

漢語形態素にはこうした音韻ギャップが数多くある一方で、2.5 節でも確認する通り、単一の音韻パターンにいくつもの形態素が結びついている、いわゆる「同音異義」の状態にあるものも非常に多い。むしろ、形態素と音韻パターンが一对一で対応しているものの方が圧倒的に少数である。言いかえると、多くの形態素が集まっている音韻パターンがある一方で、対応する形態素の少ないパターン、さらには文法的には可能であるにも関わらず、全く用いられていないパターンも存在するということである。この極端な偏りを生んでいる、相反

5) /ei, ou/ はそれぞれ /e:, o:/ と弁別されないため、後者に統一する。

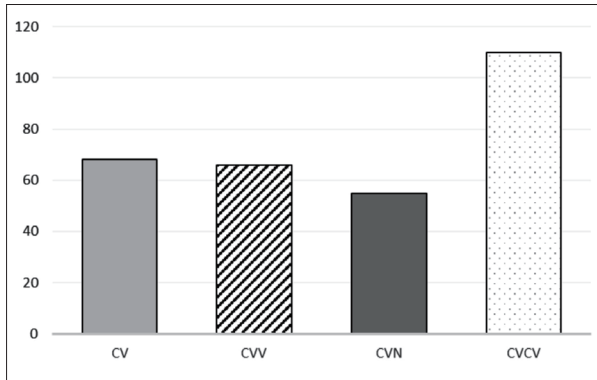
6) 長母音 /i:, \*a:/ および母音連鎖 /\*oi, \*au, \*eu/ などが、現代日本語の漢語形態素からは排除されていることは重要である。こうした特徴の分析については、歴史的な音韻変化を考慮する必要があるが、本稿では主として共時的な観点からの観察に限定し、通時的な分析については今後、別の論文にて行いたい。

する二つの特徴をどう考えるかが、漢語の音韻文法の分析において重要である。

## 2. 2 CV 構造

前述の通り、漢語形態素はその CV 構造によって CV、CVV、CVN、CVCV の 4 型に分類することができる。これら 4 型の『常用漢字』における現れ方を見ていこう。表 (1) は 4 型それぞれについて、『常用漢字』に含まれる音韻構造のパターン数だけを数え、漢字／意味の違いは考慮しない比較である：

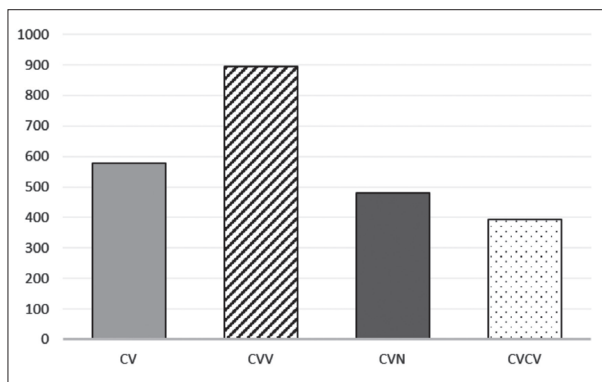
### (1) CV 構造：音韻パターン数



これらのパターン数の違いは、CV 構造の複雑性を反映していると言える。CVCV 型だけが、前述のとおり強い制限があるとは言え、2 音節を形成することができ、より多くの異なる構造を作る可能性を持っている。Tateishi (1990) の分析の通り CVCV 型の最後の母音はほぼ予測可能であり、第 2 子音は /t, k/ のどちらかである点を考えれば、他の型のほぼ倍のパターンが実在形態素として存在するのは全く妥当である。CVV 構造も一見すると複雑だが、前述の通り、実際の母音部分の構造は 5 通りと多くはなく、パターン数は抑えられていると見なせる。

次に、表 (2) は同一の音韻パターンでも漢字／意味が異なっていれば別ものとして数えた、形態素数の比較である：

(2) CV 構造：形態素数



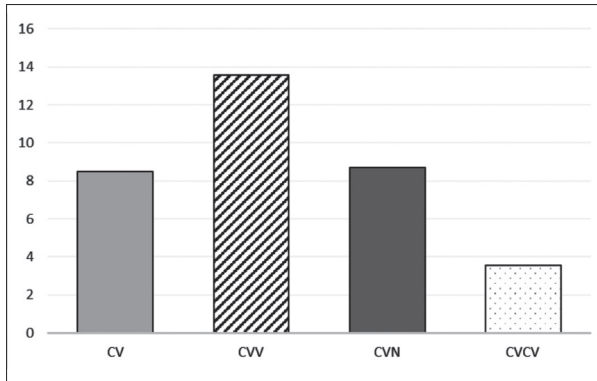
こちらの場合は CVV 型が突出して多くの形態素を持つことが認められる。この偏り理由の一つは、元来は CVV 構造ではなかった形態素が、日本語への借入時もしくはその後の歴史変化で CVV 構造を持つようになったことが挙げられる。前述の「強」/gʲian/、「合」/hʌp/ が共に /go:/ となっているのがその一例である。CVCV 型は形態素数は最も少ないが、他と比較して顕著に少ないわけではない。

形態素数を音韻パターン数で割ることで、4 型のそれぞれについて一つの实在音韻パターンごとの平均形態素数を求めることができる。それを表 (3) に示す。

CVV 型は顕著に多く、一つのパターンに平均して約 13.5 個の形態素が対応している。このことから、CVV 型には「同音異義」の形態素が多く、どのような意味で用いられているかが判別しづらいついと言える。漢語の実際の運用では、多くの形態素が自由形態素として単独で現れることはまれであり、多くの場合はいわゆる二字熟語のような複合語的構造で用いられる。そうしたより広い範囲の文脈からの情報も利用可能であるが、そうであっても同音異義語を多数発生させていることに変わりはない。この点については 2.5.1 節にてより具体的に論じる。

一方、CVCV 型の場合は他の型と比較して顕著に低く、平均して約 3.6 個である。音韻パターンは突出して多く、形態素数は最も少ないことが反映されているが、CVV 型とは 3 倍以上の差があることは注目に値する。CVV 型と異なり、CVCV 型は音韻構造から意味が比較的判別しやすいと言えるが、二字熟語などの場合には第 1 要素の第 2 音節が促音化し、表面的には対立が失われる可能性がある。例えば /hatu/ 「発」と /haku/ 「白」はそれぞれ異なる音韻パターンを持つ形態素だが、「発見」と「白鍵」では促音化が生じたことによってその違いが失われている。こうした可能性も考慮すれば、CVCV 型の低い値もそれほど奇妙ではないのかもしれない。その他、CV 型、CVN 型の平均はそれぞれ約 8.5 個、約 8.7 個と拮抗しており、全体平均では約 7.8 個である。

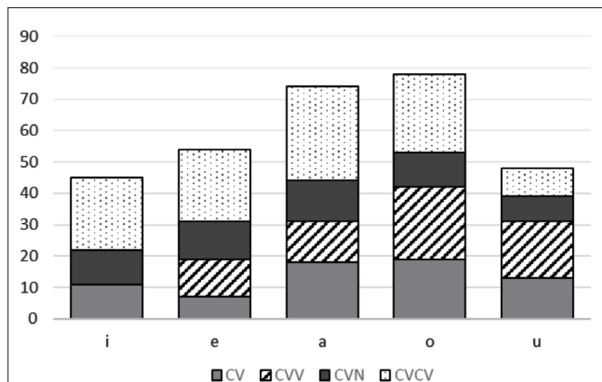
(3) CV 構造：音韻パターンごとの平均形態素数



### 2.3 母音

前述の通り、漢語形態素における母音体系は CV、CVN、CVCV 型での第 1 母音 /i, e, a, o, u/, CVV 型の母音部分を占める長母音および母音連鎖 /e:, o:, u:, ai, ui/, そして CVCV 型の第 2 母音 /i, u/ からなる。これらの母音に関する特徴を、最初の母音がどれであるかに注目して見てみよう。表 (4) は音韻パターンの集計である：

(4) 第1母音：音韻パターン数

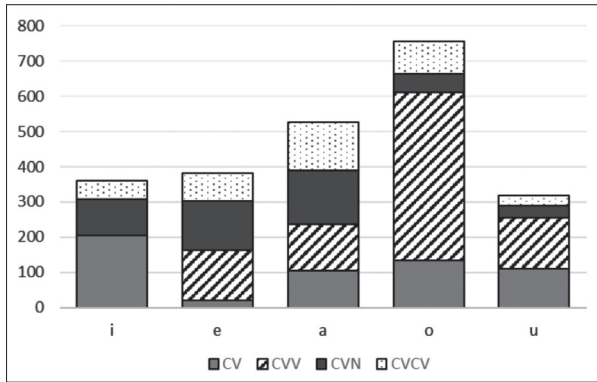


全体的な特徴としては、聞こえ度（もしくは開口度）に大まかに対応しているように理解でき、聞こえ度の大きい母音 /a, o/ を第1母音として含むものが比較的多い。顕著な特徴としては、長母音 \*/i:/ が許されていないこともあり、第1母音が /i/ ならば CVV 型ではありえないことが決定する点が挙げられる。/u/ で始まる母音パターンは /u, u:, ui/ と少なくないが、それらを含む実在パターンは多くない。特に、CVCV 型の第1母音としては、他の母音に比べて顕著に少ない。CVCV 型における第2母音での振る舞いも含めて、聞こえ度の低い高母音 /i, u/ の現れは様々な面で独特であると言える。

同じ条件での形態素の比較は表(5)の通りである。こちらの集計での際立つ特徴は、CVV 型での /o:/ を含むパターンが群を抜いて多い点である。これは前節でも確認した通り、元来は複数の異なる音韻パターンであった形態素が変化を経て、このパターンに集まったことの結果と考えられる。また、CV 型について /i/ を含むものが多く、/e/ を含むものは顕著に少ないが、これも借入時もしくはその後の歴史的変化の影響と考えられる。/u/ については特に CVN、CVCV 型での少なさが目立つ。



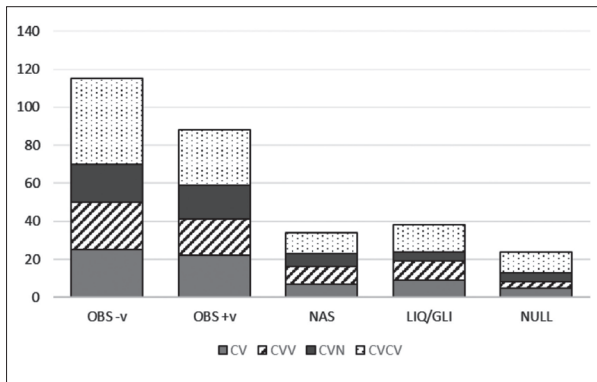
(5) 第1母音：形態素数



2.4 子音

次に、漢語形態素の頭子音に注目し、その現れ方を確認していこう<sup>7)</sup>。下記の表(6)では無声阻害音、有声阻害音、鼻音、流音／わたり音、頭子音なしの音韻パターン数を示している：

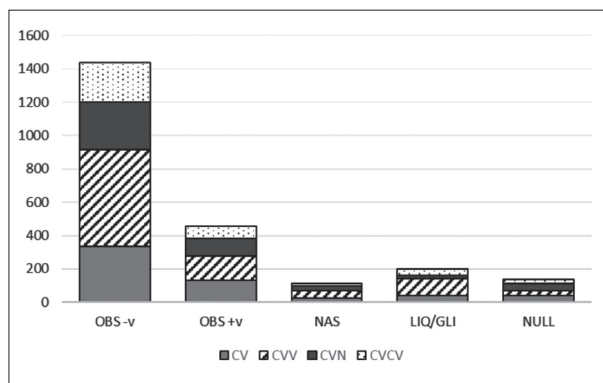
(6) 第1子音：音韻パターン数



7) 漢語形態素において頭子音以外の子音は、CVN型の末尾鼻音およびCVCV型での第2子音 /t, k/のみと非常に限られているため、分析の対象としない。

これらの子音の中では、無声阻害音で始まるパターンが最も多く、有声阻害音のパターンがそれに次ぐが、その差はそれほど大きくない。2.1節で見た通り、漢語形態素で用いられる阻害音の種類は口蓋化音も含めて多いため、それらを頭子音に持つパターンが比較的多いのは不思議ではない。しかし、下記の表(7)の通り、形態素数を確認すると非常に重要な偏りを見出すことができる：

(7) 第1子音：形態素数



パターン数とは異なり、形態素数では無声阻害音で始まるものが非常に多く、有声阻害音で始まるものの3倍以上と大きく引き離している。この違いの原因の一つは、漢語形態素がたどった歴史的变化にある。すなわち、呉音が借入された6世紀前後の中国語にはあった有声性の対立が、漢音が借入された8世紀前後には失われたことが反映されている(沖森・肥爪 2017, p. 5-14, 154-155)。その後、に弁別を担った有気音／無気音の違いは、その対立を持たない日本語では保存されず、基本的には両者ともが無声阻害音となったと考えられる。

他の子音について見ると、鼻音で始まる形態素の数はかなり少ないことも分かる。そもそも日本語では、頭子音としては /m, n/ およびその口蓋化音しか許されないこともあるが、「米」/bei/、「内」/dai/ などのように、鼻音は漢音では

多くの場合は保存されず有声阻害音に変化したことも一因であると考えられる。口蓋化音については、和語クラスではあまり見られず「漢語らしい音」の一つと言ってもよいが、2.1 節でも指摘した通り、漢語形態素における出現はかなり限られている。口蓋化音に関わる明確なギャップ群としては、CVV 型では母音部分が /ai, ui/ の場合には全く現れないこと、および CVN 型では /sjuN, zjuN/ 以外は現れないことが挙げられる。

## 2.5 実在パターン間の偏り

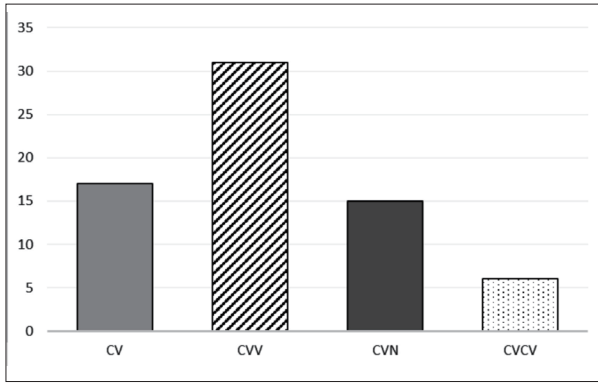
『常用漢字』において形態素に対応する音韻パターンと対応しないギャップの比較だけでなく、形態素に対応するパターンの中の偏りも注目に値する。2.2 節ですでに確認した通り、『常用漢字』として実在する音韻パターンの中にも、多くの形態素に対応しているものから、少数のもののみに対応しているものまでさまざまである。ここではその両端を、それぞれ具体例を確認しながら観察する。

### 2.5.1 形態素数の多いパターン

漢語クラスにおいて、単一の音韻パターンに対して複数の形態素が対応している例、いわゆる「同音異義」のものは非常に多い。2.2 節の通り、『常用漢字』全体でも一つの音韻パターンについて平均して約 7.8 個の形態素に対応しているが、さらにその中でも、非常に多くの形態素に対応しているパターンがある。そうした例の上位 5 つを形態素数とともに挙げると、/ko:/(67)、/sjo:/(66)、/si/(50)、/kaN/(46)、/to:/(41) である。漢語形態素は単独で用いられることは少なく、二つを組み合わせ二字熟語として用いることが多いが、例えば上位二つの組み合わせ、すなわち [ko:fo:] などは必然的に同音異義語が非常に多くなり、使用頻度の比較的高い語だけでも「交渉、考証、高尚、校章、公称」などを挙げるができる。語レベルであればアクセントによる区別も有りうるが、漢語クラスにおいては CV 構造が同じ語は、アクセントも同じになる場合が多い。先ほどの 5 つの語のアクセントは全て同じ平板型である。

こうした多くの形態素に結びつく音韻パターンの分布も偏っている。表(8)は10個以上の形態素に対応しているパターンの数を、4つのCV型ごとに集計したものである：

(8) 10個以上の形態素に対応する音韻パターン数

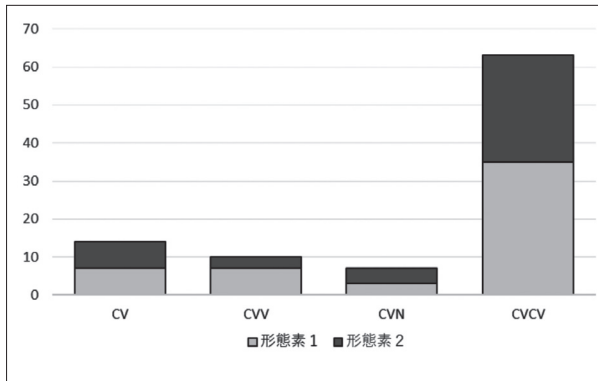


CVV型にはそのような形態素が多く、CVCV型には少ない。当然と言えば当然だが、この分布は、音韻パターン一つにつき平均していくつの形態素が対応しているかを示した2.2節の表(3)に非常に似ている。偏りの理由も同じように考えることができ、CVV型のパターンには歴史的变化の結果、多くの形態素が単一のパターンに集まった結果と考えられる。一方のCVCV型は構造の複雑性からくるパターン数の多さもあり、特定の形態素に集中しにくいと考えられる。ただしこれも、第2母音の予測可能性や二字熟語などにおける第2音節の促音化による弁別の消失を考慮する必要がある。

### 2.5.2 形態素数の少ないパターン

最後に、対応する形態素数が少ない音韻パターンについて確認し、2節の終わりとしてたい。表(9)は4つの型において、一つの形態素にのみ対応するパターンおよび二つの形態素に対応するパターンを集計したものである：

(9) 単一もしくは二つの形態素にのみ対応する音韻パターン数



『常用漢字』においてこうした形態素は2種の合計で94個あるが、7割近い63個がCVCV型に集まっている。この特徴もやはりCVCV型の音韻構造的な複雑性が関係していると考えられる。これらの形態素も二字熟語における促音化により、判別がやや難しくなる可能性はあるが、それを差し引いたとしてもこの偏りは顕著である。

こうした形態素は、音韻構造からの意味の判別が他のものと比べて格段に行いやすいと言える。これらには/tja/「茶」、/ku:/「空」、/getu/「月」、/wa/「和、話」、/rjoku/「力、緑」など日常的な使用頻度の極めて高いものも含まれており、漢語形態素としては比較的珍しい自由形態素として用いられるものも少なくない。こうした特徴は、これらの形態素が漢語クラスとしてはやや特殊な位置づけにあることを示唆している。

### 3. 考察・まとめ

これまでに見てきた通り、漢語形態素の音韻構造には様々な面で偏りがあることが、『常用漢字』の字音を調査することにより明らかになった。漢語の文法的には可能と考えられる音韻構造のパターンであっても、形態素との対応が無く、全く用いられていないものが多数存在する。また、形態素に対応して

いる音韻パターンの間でも、対応の数には大きな偏りがあり、その差は大きい。個々の子音や母音の現れにも、様々な制限や偏りが存在し、多く用いられる音もあれば、そうでない音もある。今回の調査で明らかになった点の中には、Tateishi (1990) などの先行研究ですでに指摘されているものもあるが、『常用漢字』という明確な資料を用いて、音韻構造の特徴に関する量的な裏付けを示すことができた点は重要である。

言語運用上の効率を考えれば、こうした偏りを解消するよう方向に音韻変化が生じることは考えられることである。例えば、「同音異義」のものが集まっているパターンに対応する形態素の一部を、用いられていないギャップや対応する形態素の少ないパターンに振り分けることで、意味の判別が行いやすくなり、運用上の効率は上がると推測される。しかしながら、漢語形態素が日本語母語話者の知識の一部となってからすでに1000年以上が経過しているにも関わらず、そうした動きは、少なくとも音韻構造に関係する形では起こっていないように見える。漢語形態素における極端な偏りは現在でも存在しており、語レベルでも「同音異義語」に起因する、意味判別の非効率性の問題を抱え続けながらも運用が続けられている。この点については、そもそも自然言語が「同音異義」による非効率性を、実際の運用上はどうあれ、文法としては問題とはみなさず、語の音韻構造に干渉するような変化や交替を誘発しないと考えることができる。

また類似した特徴として、漢語クラスの非拡張性を挙げるができる。漢語は中国語からの借入時にも、借入後の日本語の形態素としても音韻変化を経てきており、前述の通り、結果として現代語において一部の音韻パターンに多くの形態素が集中するという事態が発生した。また、語レベルでも音型の変化（例：「格子」/kakusi/ → /ko:si/、「言語」/goNgo/ → /geNgo/）も起きており、漢語クラスにおいて音韻変化は珍しいことではない（沖森・肥爪 2017）。しかしながら、こうした変化はすでに存在する漢語形態素についてのものであり、新たな音韻パターンを持つ漢語形態素が、日本語母語話者の知識として加わることは、少なくとも現代日本語では考えにくい。

この点を考える上での例として、中国の地名や文化に関わる借入語彙が興味深い。例えば現代の日本語では、「北京」[pekɪn]、「上海」[ʃaŋhai]、「麻雀」[ma:ʒan]、「飲茶」[jamuʃa]などを漢語音韻論に則った発音ではなく、中国語発音のいずれかのバリエーションに比較的近い音韻パターンで発音する。しかしながら、これらを構成する「上」/sjaN/や「麻」/ma:/などの要素が日本語の中で独立した形態素として生産的に用いられているとは考えにくく、これらを用いて新たな語を生み出すことは、少なくとも漢語文法の枠組みでは難しい。こうした語は、書き言葉では多くの場合は漢字で記されるにも関わらず、文法的には漢語として受け入れられておらず、語レベルで外来語として扱われていると考えるべきである。

こうした漢語クラスの非拡張性は、外来語クラスの拡張性とは対照的である。外来語語彙の大部分はヨーロッパ言語、特に英語からのものが大部分を占めているが、語彙として拡張性があり、日々あらたな形態素が加わっている。また、それに影響を受ける形での、音韻文法の拡張も観察される。例えば pudding という英単語は日本語では「プリン」[purin]と「プディング」[puɔɪŋgu]という二種類の借入語として受け入れられているが、より新しいものである后者は、日本語の音韻文法で許される構造が拡張され、[di]という音連鎖が可能になったことを示している。こうした拡張性の違いから、現代の日本語では外来語クラスこそが他言語からの借入を受け入れる領域として機能しており、漢語クラスはもはやそうした機能を喪失したと見なすことができる。

だからと言って、漢語形態素がすでに音韻文法による生産性を離れ、語彙として化石化しているとは言えない。音韻パターンについての実在形態素／ギャップの強固な関係だけでなく、CVCV型における促音化や、/h/から[p]への音韻交替などは比較的安定して行われている。また、これまでになく形態素の組み合わせによる、新たな二字熟語の生産も問題なく行うことができ、それらの可能な音韻構造や音韻変化も予測可能である。こうした非拡張性と生産性という相反するようにも見える特徴は、日本語の心的辞書における漢語クラスの持つ独特のものである。

全くの推測だが、こうした特徴は中国語という日本語とは全く異なる音韻文法を持つ言語の語彙を大規模に借入するという、日本語の歴史において最重要と呼んでもよい出来事の影響ではないだろうか。この文法面から見ると極めて難しい問題を、ソフトランディングさせるための方法として、日本語心的辞書の中に、漢語クラスという独特の領域を設け、他の語彙とは半ば隔絶させるような形で文法を形成し、運用を行ってきたと考えることができる。

今後の漢語クラスが日本語の中でどのような道筋をたどるかは定かではない。しかしながら『常用漢字』を調査、分析することで明らかになった特徴、特に偏りを是正するような動きが無いこと、外部からの新たな構造を受け入れないことから考えると、少なくとも音韻構造の面では大きな変化は今後も起こらないとの予測を立てることができる。

#### 参考文献

沖森卓也 編 (2010) 『日本語史概説』 朝倉書店

沖森卓也・肥爪周二 編 (2017) 『漢語』 朝倉書店

Tateishi, K. (1990) Phonology of Sino-Japanese Morphemes. *University of Massachusetts Occasional Papers in Linguistics 13*, 209-235. Amherst: University of Massachusetts, GLSA.

#### 資料

平成 22 年内閣告示第 2 号／文化庁 (2010) 『常用漢字表』

[https://www.bunka.go.jp/kokugo\\_nihongo/sisaku/joho/joho/kijun/naikaku/kanji/](https://www.bunka.go.jp/kokugo_nihongo/sisaku/joho/joho/kijun/naikaku/kanji/) (2022/8/7 最終確認)